

小説

夢語り

ゆとろ 満

それは不思議な夢であった。

東彦は訪ねたこともない友人榮治の自宅へ向かっていたのである。市電の大病院前停留所で下車すると、病院に隣接している東北大学医学部の門前に向かった。年代を経て緑青を吹いた両扉が重々しく開かれていた。この門をくぐり構内を真っ直ぐ進むと柏木町にある東彦の母校仙台高校へは直であった。母校は略して仙高と呼ばれていた。学校の背後は新坂通を含めた北山の地域が広がっている。地名が示すようにこの地域は、仙台市の北部に位置している。この北山界限は新寺小路とともに仙台の寺町を形成している。寺が多いということは樹木も多いということでもある。当時、この北山一帯は広大な緑地を形成していた。夢の中

の東彦は榮治の居宅を北山五山の一つで、支倉常長の墓があるといわれている光明寺近くと勝手に決め込んでいた。この寺には父方叔父の墓があり、東彦はこれまでに二、三度お参りしていた。このことが榮治の住む場所の発想を生み出したのかもしれない。榮治は仙高三年生時での同級生であった。学期始め頃は「中原くん、渡辺くん」と呼び合っていたが、一学期半ば過ぎには「エイちゃん、ハルヒコくん」と親しく呼び合う仲になっていた。しかし、東彦の心の中には榮治へのコンプレックスが宿っていた。生まれ育ちに関わってだった。東彦は仙台市の南端に位置する郡山という農村部に育ち、それに引き替え榮治は、仙台市の最も華やかな商店街の一番町で生まれ育っている。し

かも彼の実家は仙台市民であれば知らない人がいないほどの有名店であった。郡部生まれと都会育ちという環境の違いである。東北の人間が東京人へ持ついわれなき劣等意識といえれば分かり易いかもしれない。だが榮治は自分の出自などひけらかすことなど少しもなかった。東彦が自身を「田舎者」などと卑下し、劣等感を持つことなど全く無用であった。しかし、その意識が払拭できず、いつまでも拘泥していたのは東彦の心の弱さであり、あるいは自尊感情の裏返しであったかも知れない。優越感と劣等感のコインの表裏とも言われているが、東彦の鬱屈した感情はそれを示しているのかも知れなかった。

東彦は医学部校舎内の通路をじっと見詰めていた。そのうちにとんでもない考えが心に浮かんで来た。

「この広大な医学部、付属病院の敷地を跳び越えたならば榮ちゃんの自宅は近い」

この思い込みは東彦の脳みそを鷲掴みにしてしまった。

「まさか」と、さすがに東彦は苦笑した。だが、心の中の声が「おもしろいぞ」と語りかけて来た。そのつぶやきに東彦は抗することができなかった。

「やってみるか」

心の中の問いかけにすぐ答えが返って来た。

「おもしろい」

東彦の顔が自然にほころんでいった。

右足を上げると同時に左足で地面を蹴った。剣道の跳び込み面の動作である。何と、身体はそのまま上空に向かっていったのである。そして、さらに慣性の力が加わったのか十階建て建物の屋上ほどの高さまで達し、ゆっくりと浮遊し始めた。眼下の大学や病院を囲む長い塀は畳を縦に並べたような頼りない存在に見えた。空中浮揚などという予想だにしないことが突然として起こったのである。あの世への旅路の途中で三途の川の手前なのかと東彦の動揺は半端なものではなかった。しかし、そんな東彦の気持ちとは逆に、体の浮遊はゆっくりとではあるが続けている。だが、こんなことは東彦ばかりでなくほとんど人が経験したことではない。東彦の心は動揺していた。そして、不安に駆られるままにあわてて足をばたつかせた。もがけばもがくほど身体不安定さは増していく。その上、「もしこの浮揚の力がばたりと停止したら」という不安が脳裏を掠めた。不安は恐怖となった。思えば悪い方へと向かう。

「身体はまっしぐらに地上に落下してしまふ」

東彦は地上に激突し、血しぶきを上げて無残に転がる自分の死体を想像するだけで恐ろしくて、おののき震えた。その恐怖に抗するだけに必死に足をばたつかせ、何かに取り縋ろうと両の手を空中に伸ばし、幾度も握ったり開いた

りした。しかし、手がかりになるものなぞあろうはずがなかった。

ふと東彦はあることに気づいたのだ。ばたつかせている手足に何の抵抗も生じないのである。それはまた不思議な感覚であった。手足を動かしている筋力が普段の倍も三倍もの力を発揮しているのに何の手応えもないのである。

「空を切る」とはこういうことなのかと東彦は妙に合点がいった。

そんな東彦の頭脳に閃くものがあつた。

「今、おれは無重力状態にいるのだ。これは空中遊泳だ」と。

その閃きは、意外にも東彦に落ち着きをもたらした。

「何もあがくことなどない。流れに身をまかせよう」

東彦はそう得心すると身体の力を緩め、自転車を漕ぐように両足をゆつくりと踏み回した。手も平泳ぎのように胸の前で円を描くようにゆるゆると回転させた。そのためか身体が安定してきた。そのことに意を強くした東彦はゆつくりと足を蹴り、手は水を掻くように上方から下方へゆつたりと動かした。身体はそのコツをすぐに会得した。すると身体がふわりと上昇した。風もない。日は輝いているのだが決してまぶしくもない。体を暖かな春の陽気が覆い、呼吸は軽やかになった。すると身体のこわばりがほぐれてい

った。東彦に四方を見渡せる余裕がようやく生まれた。目を下にするといつもとは違う風景が広がっていた。意外な

ほど眼下の風景は整然としていて調和がとれていた。地上では雑然と見えた建物群は樹木にほどよく囲まれ、建物の間を縫う白い道路はまるで血管のようであり、車や人の流れは血液のようであった。豆粒のような人の歩みは地上で見るとのんびりとしていた。目を北の方に向けると丘陵はほとんど樹木で覆われ、その中に寺の薨や建物の白い壁がぼつり、ぼつりと見えた。その後ろには森や田畑などの緑が連なり、遙か泉ヶ岳まで延々と続いていた。まるで樹海のようにあつた。

真下に左右に延びた建物とその北側に四角の空間が見えた。「仙高だ」。東彦は小さく叫んだ。紛れもなく学びの場でも思い出深い学校であつた。懐かしさが溢れて来た。しかし、今はJR東日本仙山線の東北福祉大前駅から北へ八百メートル程の国見の地に移転してしまっている。あるはずがないのである。東彦の意識は完全に高校時代に戻っていたのである。表通りから四辺ほどの通路に入ると正面にコンクリート建ての本館、その両サイドに二階建ての木造校舎が見えた。校門を入ると直ぐ右手に三階建ての仙高会館が見える。この建物は東彦たちが卒業する前年に創立二十周年記念として建てられた。ここには食堂があり、ほぼ毎日

のように利用した。

校庭の北側には肩を寄せ合うように建つ民家があつた。そこだけが樹木がなく家々がむき出しになっていた。どんな構造の家なのかと興味を持った東彦は、右足を蹴った。すると身体は何の抵抗もなくスイと左前方に進んで行った。ペランダに干し物のある一軒が目に入った。真っ白なシャツが風に揺れているのがかすかに見えた。そこに人の息吹が感じられた。不意に東彦の目頭は熱くなった。顔を上げると、涙に曇った目にとこまでも透明な薄青の空が広がっていた。その青の層は神秘なまで深く、魂が吸い込まれていくようであつた。ただ綿菓子を千切つたような雲が二、三ぼつかりと浮いているだけであつた。「宇宙において人間は孤独である」と語つたある宇宙飛行士の言葉が不意に浮かんで来た。

東彦は、普段の景色とは全く違う様子に心を奪われていた。東彦の心に何か働いた。東彦は、はつとなつた。

「榮ちゃんの家を訪ねる途中だ」と思ひ出したのである。東彦は光明寺に向かうため、身体を九十度ほど右へ転換した。やはり緑に覆われたなだらかな丘陵が続いていた。

榮治は箱根駅伝で有名な東京の大学を卒業後、故郷仙台に戻り宝石商である家業を助けていた。互いが社会人となつた十年程後に、東彦は榮治の勤める店を訪ねたことがあ

つた。榮治は東彦が出会つた高校の時から物静かであつた。

それは生来のもと思われた。店内で一目見た瞬間、榮治はまた一段と風格が増して来たのと東彦は思った。言葉遣いといふ物腰といふ優美ささえ感じ取られた。東彦も思わず身を正し、よそ行きの言葉で受け答えをしてしまった。後に榮治は東彦の緊張感ぶりを冷やかしながらも「周りに店員がいたものだからやむを得ず商売上の対応をしてしまった。ごめん」と謝つてくれた。その場は笑い話で終わったが、東彦はガサツな自分に比べ榮治は人としての品格が増していることに羨ましさを感じたのも確かであつた。

榮治は忙しい身でありながら高校の同期会やクラス会の幹事を務めていた。お陰で東彦は年に一度は同期の友人たちと会うことができていた。また、榮治とは年に二、三度は手紙のやりとりをしていた。東彦は、彼が三月二十日に送つて来た手紙を思い出した。「サンクスレター」という言葉のいわれについて記してあつた。

「アメリカの一流のプロゴルファー達は試合が終わると成績に関係なくスポンサーや大会関係者に感謝の手紙を書いているようで、その手紙をサンクスレターと言っているようです。私は一流でも何でもありませんがこれに感銘を受けました。それでこれを真似て当選した年賀はがきを送つてくれた差出人に賞品の切手を貼り、感謝の手紙を書いて

います。十年ほど前からです」

東彦は榮治らしい律儀なやり方と心を打たれた。榮治に教えられたこのサンクスレターを自身もやってみようと思つた。

「光明寺はこっち方面だな。よつし、榮ちゃんに会えるぞ」

東彦はすっかり晴れやかな気分になり、気合いを入れて左足を蹴つた。その時だった。東彦の胸がちくりと痛んだ。

「榮ちゃんに謝らねば」

痛みがそうつぶやいていた。

瞬間、東彦を取り巻く光景が拭いたように掻き消えてしまった。

目が覚めたとき、東彦は周りをキョロキョロと見回した。自分がどこにいるのか判断がつかなかったのである。しかし、それは一瞬の間であつた。「自宅の寝室だ」と分かるどほととした。カーテンとカーテンの隙間から明るい日差しが縦の帯となつてベッドの端に当たっていた。その部分の際だつて白く輝いていた。その光の帯の中で数え切れない程の極小の粒子が浮遊し、きらり、きらりと輝いていた。

「なぜあんな荒唐無稽な夢を見たのだろうか」

た。自習時はいつもソフトボールであつた。

この日、東彦は左腕の肘の負傷で教室に残り、翌日提出締め切りの国語のリポートを書いていた。東彦の他に、体育嫌いの武田、そして松本が頭痛と称して教室に残っていた。東彦は武田とは馬が合い何かと行動を共にすることが多かった。彼は興奮したり、慌てたりすると口ごもる癖があつた。それは彼の気短さを表しているのかもしれない。しかし、背は高く、がっしりとした体格をしていたので威厳ありそうに見えた。彼は生物部に属し、時折理科室のコンロでスルメや餅を焼いてご馳走をしてくれたりしていた。他方、松本はクラスの中で一番背が低かつた。しかし、口は達者で負けず嫌いなところがあつた。東彦と松本は親しく口を利く機会は少なかつた。東彦が理屈っぽい松本を敬遠していたこともその要因であつた。

東彦がリポート用紙を取り出し構想を練りだし始めた頃、武田と松本が言い争いを始めた。「またか」と、東彦は顔も上げずレポートに鉛筆を走らせていた。二人はクラスの中で一番の不仲で、まさに「犬猿の仲」という表現がぴつたりの関係であつた。背の低い松本が武田と並ぶと武田の顎辺りしかなかつた。二人は些細なことで良く口喧嘩をしていた。腕力では松本に遥かに勝る武田ではあつたが、理屈では口の立つ松本にいつもやりこめられていた。腕力を

東彦はまだ十分に眠りから覚めない頭であれこれと考えを巡らした。しかし、納得できるような答えは見つからず、釈然としないままに寢床から起き上がった。だが、気持ちいかに引きずられているようですつきりとしんない。もやもやとした気持ちのまま、勢いよくカーテンを開けた。シヤーというカーテンの走る音と同時に光の波が東彦の顔面を襲つてきた。思わず東彦は目を固く閉じ「まぶしい」と叫んでしまった。その叫びが東彦の朦朧とした脳の靄を払つた。「榮ちゃんだ。榮ちゃんが何かを伝えようと夢に出たのだ」。東彦はようやく納得した。しかし、その瞬間どきりとなつた。これは彼の異変の報せ、夢知らせなのではないかとザワザワと胸騒ぎがしたのである。

七十七歳を迎えようとしている東彦に、最近友人たちの訃報や癌発症の知らせが立て続けに届いていた。物事の解釈が悪い方へと傾いてしまうのは致し方がなかつた。

榮治に対し、東彦には精神的借りともいふべき負い目があつた。

高校三年の十月、体育の授業の時であつた。この日も自習であつた。「この日も」というのは担当の江美教諭は宮城県高等学校野球連盟の理事を務めていた。そのため会議などで出張することが多く、授業が自習となることがあつ

使わなかつたのは武田の自制もあつたが、やはりクラスの暴力を許さない雰囲気だつたらう。そのうち二人はもつれるようにして廊下に出て行つた。

「廊下で話をつけよう」と、どちらかが言つたのだらう。東彦たちの教室は三階の一番東端にあつた。隣は教材室、化学の実験室と続き、東彦たちの教室はいわば離れ小島のような教室であつた。多少の物音を立てても教師たちには伝わらなかつた。クラスの中にはいわゆる中学浪人の同級生が数人いた。武田も松本もそうであつた。その他に酒井がいた。彼は無口ではあつたがなんとなく存在感があり、クラスの多くが彼に敬意を持つていた。そんなことで彼を呼ぶときには「さん」を付けていた。

酒井はクラスの重しのような存在であつた。自我意識が強く、何かと勝手な行動をしがちな高校三年生の集まりであるクラスをしつかりとまとめ、支えてくれていた。例えばクラスでもめ事や不祥事などがあつたときに最後は必ず彼が仲介に入り、丸く収めてくれていた。ようするに彼は分別があつたのである。

また、このクラスからは応援団長を出していた。さらに二年生の時ではあつたが生徒会長をした者もいた。応援団長は長身で骨太の三原であつたが、根は穏やかで優しい人柄で人望があつた。硬式野球の春秋の大会、夏の全国大会

県予選では応援団は花形であり、そのなかでも応援団長は生徒全員の統率者として顔を利かせていた。生徒会長だったのは東彦である。応援団長に比べれば生徒会長は地味で、年二回の生徒大会の開催、運営、それに毎月一回の朝会の司会、進行程度であった。朝会などでは二年生ながら役目上注意をしたり、また生徒の規律に関わるもつともらしい話をしたりしていた。そんなことで生徒たちからはあまり快く思われていなかった。

しかし、応援団長や元生徒会長が在籍していることはクラスメートたちの微かな自慢であり、また誇りであった。従ってクラスでの不祥事の発生やめ事を事前防止する役割を果たしていたことも事実であった。こんなクラスであったので、担任の海藤先生は生徒たちを信頼してくれていた。ホームルームの時間では必要な連絡以外はほとんど生徒たちに任せるのが常であった。

武田と松本が口喧嘩限りで止まっていたのは、酒井や三春の存在が大きかった。特に酒井は暴力沙汰を嫌った。彼は髭が濃く、まるで筋肉の鎧を着たような体格だった。新学期の始まった頃クラス内での暴力沙汰が起こったことがあった。その時彼は、「暴力は止める」と大声で制止した。その瞬間、クラス内が肅然となり、事を起こしていた当事者はすぐに手を引いてしまった。それ以来、クラスでの暴

力沙汰は皆無となった。暴力が無いということはクラス構成員の心を平穏にする。平穏さはクラスのとまりに繋がっていた。

東彦がリポートに熱中し出した頃、低い声と共に体がこすれ合うような鈍い音が聞こえて来た。顔を上げると黒板の前で二人が揉み合っていた。いつの間にか二人は廊下から教室に戻っていたのである。松本が武田の胸辺りに必死にしがみついていた。その体形のまま武田の体を押し込んでいたのである。武田は松本の両肩を押し剥がそうとしていた。しかし、食らいついた松本の upper body はなかなか離れない。そのうちに武田は拳で松本の頭を殴り始めた。さすがにたまりかねた松本は両の手を武田の体から離れた。「この隙を逃すものか」とばかりに、今度は顔面や腹部を武田は殴り始めた。

さすがに「やり過ぎだ」と東彦は思った。腰を浮かし、止めに行こうと思った。しかし、そこで東彦の身体は硬直状態に陥った。「この際だ、もつとやっつけろ」と、別な東彦が武田をけしかけているのだ。さらに、「松本の鼻をへし折ってやれ」という呪いめいた言葉までその後が続いたのだ。東彦は思いもよらない己の非道さに凝然と立ち尽くしてしまった。

ぼこっ、ぼこっという肉がへこむ音が鈍く教室に響いた。は極めて温和であった。酒井はちよつと伸び上がるようにして武田の背後に寄った。武田は無言であった。顔を背けるように右横に捻っていた。

「浩介、お前松本を殴ったのか」
酒井の声に珍しく怒気が含まれていた。

「おい、しつかり答えろよ」
無言のままの武田に、酒井はさらに底力のこもった声を武田に浴びせた。その声の迫力に武田はたじたじの態で、何も反論しなかった。目を伏せ、項垂れているようにも見えた。後悔が武田の心を襲って来ていたのだろう。

「同じクラスの者を殴ったりしているのか。それに程度っていうものがあるだろう。鼻を潰すほどに殴りつけるバカがいるか」

酒井の言葉は同級生というより、まるで教師が生徒を叱っているような口調であった。しかもそのいい条は全く正論と言って間違いない。何も言い返せない武田は、苦虫を噛み潰したような表情であった。

「いいか、抵抗もしない者を加減なく殴るなんてその辺のチンピラがすることだ。同じ学校、同じクラス、同じ釜の飯を食ったも同然のクラスメートをチンピラのような真似をして痛めつけるなんて恥ずかしくないのか」

そして、鼻から血が噴き出して来た。東彦ははつと立った。そして、「これはまずい。止めなければ」と思った瞬間、和やかな、そして笑いが混じった声とともに足音が廊下に響いた。その声を耳にした武田は素早く拳を引き、自分の席に戻ろうとした。同時に二、三人のクラスメートが教室の後ろドアから入って来たのである。酒井、榮治、そして三春であった。酒井は一瞬で教室内の異変を感じ取った。

「おい、何してんだ」
低い、ドスの利いた声であった。
松本の鼻から出ている血がポタポタと床に垂れていた。彼は拳で鼻を押さえながら入り口近くの一歩前の席に着くやポケットからハンカチを引っ張り出し、それで鼻を押さえ机にうつぶした。

酒井はそれをちらりと見、それから真正面に目を移すにつかつかと武田に歩み寄っていった。武田は殴った拳を後ろに隠し、酒井の視線を避けるようにして自席へ向かった。「浩介、待てよ」
ビンと教室内に響き渡るような酒井の声であった。ただ、彼はレスリング部のキャプテンをやっており、筋肉質の身体はまるで弾丸のようなダイナミックさがあった。しかも、抜群の運動神経の良さを持っていた。しかし、普段

さすがにここまで言われると武田も黙っていられなくなったのだろう。打ち沈んでいた様子の体を起こし、酒井を睨んだ。

「浩介、お前はまだ反省していないのか。お前がそんな態度ならこっちにもやりようがあるんだぜ。覚悟を決めるんだな」

それまで無言のままじつと成り行きを見ていた三原が二人の側に寄っていった。そして腕を組んで心配そうに見守っていた。何かが起こったら止めようという心支度がありありと見えた。

酒井がいう「覚悟」とはどんなことか東彦には定かではなかった。しかし、単なる脅しではないことを東彦は感じていた。東彦は、武田が早く謝ればいいのにと思うのだった。しかし、武田は意外にしぶとく、依然として酒井を睨み続けていた。事情を知らない者が見たら酒井が武田に脅しつけられているように見えたに違いない。酒井にしても見下されていると思うたのだろう。酒井は厚い唇をぎゅつと噛みしめ、大きな丸い目をさらに広げ、逆に武田を睨みつけた。ひげ面がぶるぶると細かく震えていた。

「大丈夫かな」

「大丈夫だよ。酒井さんは決して殴ったりしないよ。彼はレスリング部のキャプテンで全国大会出場も果たしている

さは疑心暗鬼を産む。榮治にすっかり見透かされていたと思ひ込んだ東彦は冷静な判断力をなくしていた。東彦は、「ごめん」と小さく言うのが関の山であった。

「おれに謝られてもしようがないけど」

榮治は冷たくそれだけ言うのと東彦の所から離れていった。東彦は身の縮む思いであった。そして、悄然として酒井たちの姿を見ていた。痺れたような頭に最初に浮かんで来たのは、生徒会長でもあった東彦のこの汚い行為が級友たちに知れ渡り、クラスから排斥されることであった。そしてまた、最も恐れたことは榮治との友情が絶たれることであった。しかし、それは身から出た錆で致し方がないことであつたし、諦めるしかない。それにしても、松本のことを考えた。彼はきつと東彦を恨んでいるだろうと思つた。もしかしたら殴つた武田よりも傍観したままの東彦を憎んでいるかも知れないと思つた。

酒井と武田は睨み合ったままであつた。そこへ榮治が歩み寄っていった。そして何事か三春に話しかけた。東彦の耳には届かなかつたが、榮治ら二人が目を合わせ頷くと、それぞれが武田の肩を軽くポンポンと叩いた。そして何か話し掛けていた。直に酒井と武田の二人の緊張が解けて行くのが見えた。そして今度は酒井が武田の肩を二、三度叩いた。武田がそれに応じて小さく頷いていた。武田は榮治

猛者だからな。その力を練習や試合以外では決して使わないよ。見てみな、彼の両手はズボンのポケットの中に入れてたまだろう。彼が拳を使わないという表示さ。それに三春君が側にいるから直に収まるよ」

東彦の隣りに立つ榮治の声は至極冷静であつた。

「それより」と言つて、榮治は少し間を置き、東彦の方に体を向けて来た。

「何で止めなかつたんだよ」

「えっ」

「武田と松本の喧嘩だよ」

榮治の言葉には怒気がこもっていた。

東彦はさーつと顔が朱に染まっつていくのが分かつた。隠しようのない羞恥心が顔に出たのである。東彦は項垂れ、言い返すどころか弁解さえできなかつた。今更に先ほどの言語道断な自分の気持ちに深く恥じ入つた。しかし、もはや覆水盆に返らずであつた。

松本が一方的に武田から殴られているのを傍観している東彦を榮治がなじるのは当然である。しかし、そう思った瞬間、東彦の紅潮した頬が見る間に青ざめていった。東彦は、榮治が「もっと松本を痛めつけろ」という東彦の卑劣な心を読み取っているのではないかと思つたのである。しかし、それは東彦の深読みであつたかも知れない。やまし

ら三人から背中を押されると、まだ顔を伏せたままの松本の所へ近づいていった。武田は小さく何事かを話し、そして、頭を軽く下げた。しかし、松本の伏せた体は微動だにしなかつた。

そんな松本の様子に東彦は憐憫の情が湧いてきた。それと共に自らの行為の卑劣さを思い知り、ひどく悔やんだ。そして、早く松本に謝らねばと心がはやつた。その急ぎ込む心を抑えながら松本の席へと向かつた。

その時、ドヤドヤと級友たちが教室へ入つて来た。教室の中は男たちの汗の匂いとざわめきで溢れた。その一団の中から「東彦、レポート仕上がったか」という声が飛んで来た。東彦の友人の一人の隼であつた。隼の額は少し汗ばんでいた。サッカー部で活躍している彼の顔は日に焼け浅黒く、開いた唇からこぼれる歯はいやに白く見えた。彼の突然の問いかけに東彦は無言のまま顔を向けた。何の憂いもなさそうに明るい隼の表情に東彦は答える術を失つていたので。そんな沈んだ東彦を少しも気遣うこともなく、「仕上がったら見せてよ。参考にするから」と屈託なく言つてきた。

「うん、分かつた」

東彦は釣られるよう答えた。

隼は借りた東彦のレポート内容を参考以上に利用するに

違くない。それなのに隼は全く後ろめたさがない。東彦はそんな隼を羨ましく思った。

「じゃ、昼休みな」

隼はそれだけという窓側の一番後ろにある自席へと向かった。東彦は隼とのやり取りで出鼻がくじかれてしまった。緊張感が薄れ、松本への謝罪の気持ち急速に萎えていった。ちょうど膨らんだ風船の空気が一気に抜けてしまったのと似ていた。「昼休みにでも謝ろう」。弁解がましくつぶやくと彼もまた自席へ着いた。

午前の最後の授業が始まった。東彦は授業に集中できなかった。自分の先ほどの行為が悔やまれてならなかった。そしてまた、松本のことも気になった。時折松本の様子を窺うよう視線を送った。しかし、松本は依然として顔を机に伏せたままであった。いつまでも続く松本のその態度に東彦は松本の執念深さが垣間見えた。そして、「なんだ当てつけがましくいつまでも、いい加減にしろよ」と思ってしまった。すると、先ほどの同情心は掻き消え嫌悪感すら湧いて来た。

彼と同様に数人が腕を枕にして臥せていた。毎授業時の光景である。事情を知らない級友たちからは松本も同類と見られていただろう。それは武田にも東彦にも好都合であった。結局、東彦は松本に謝ることなくその日を終えた。

謝罪が一日延びればその機会は一日遠くなる。それに伴い罪悪感も薄れていく。こうして東彦は松本に自らの非を謝ることなく、そして後悔を残したまま卒業してしまった。しかし、その後悔は東彦の心の呵責として現在まで続いているのだった。

その後、松本はクラス会や同期会に一度も姿を現したことがない。従って、彼に関する情報も少なく、公務員になったということしか聞こえてきてない。殴打事件が松本に深い傷をもたらしたことは間違いなかった。

また、この件に関して東彦は同級生のだれにも話してはいない。せめて榮治にだけには洗いざらい話しておくべきであった。そうすれば少しは心が軽くなり、いつまでも引きずることはなかっただろうと思う。

スマホの着信音が聞こえる。東彦は本や資料などで雑然とした机の上を探すが見当たらない。最近、目の視力が落ちるだけでなく耳も遠くなっている。着信音の方向がなかなかつかまえないのだ。そうするうちに「あっ、バッグの中だ」と思いついた。そのバッグはA4判用紙が楽に入るようにとつい最近購入したばかりである。ファスナーを開けバッグの中を覗き込む。着信音が一段と高くなった。だが、見つからない。手を突っ込みあちこちかき回す。財

ど」と、枕詞無しの言い様である。

「何かあったの」

東彦の動悸が速まった。と、同時に胸の中に不安が広がった。

「実は榮ちゃんが亡くなったのっしや」

「えっ、死んだの。いづっしや」

級友たちとの会話になると自然と仙台弁になって訛ってしまう。

「二十日だっちや」

「二十日って、今月の二十日」

東彦の声はちよつと咎めるような尖ったものになった。東彦はしまったと思った。突然の訃報の知らせに仰天し、持っていくようなない怒りがつい出てしまったのである。坂上に向けたものではなくなかった。しかし、そう捉えられても仕方なかった。

「んだっちや。一週間前のことだせば」

坂上は気にする様子はなかった。しかし、彼の口調は沈んでいた。榮治の死に彼もまた不条理さを感じていたのかもしれない。

「うーん」と言っただけ東彦は言葉が出なかった。坂上もしばらく沈黙したままだった。その重い沈黙を破るように話し始めた。

布や書類を閉じているバインダー、それにマスクの束など雑然としている。着信が切れてしまうのではないかと焦りが募る。ようやく平たく四角のものに手が触れる。バッグの内ポケットに大事にしまいきんできたのである。東彦は「間に合った」と思いながらスマホを取り出し、開く。着信音が警笛のように聞こえる。人差指でスマホの画面をスライドすると坂上からであった。やはり高校の同級生でクラス会「竹の子会」の幹事をやっている。この名称は校章「竹に雀」のデザインにちなむ。校章の「竹に雀」は伊達家家紋から借用して作成したと言われているが定かではない。竹の子会は喜寿の祝いを兼ねて七月に開催されることは既に決定済みであった。東彦はこのクラス会についての連絡であろうと予想しながら「あっ、どうも」と話し始めた。

「榮ちゃんのことだけど何か聞いている」

前置き無しのいきなりの本題だった。坂上からは年一、二度電話が来る。全てクラス会に関わることだけである。冒頭はいつも天気の話からである。その後、彼が掴んでいる級友たちの消息について話してくれる。「神奈川在住では級友たちの情報が入らないだろう」とおもんばかりのことに違くない。東彦はそう推測していた。坂上の気遣いが東彦にはうれしかった。それが「榮ちゃんのことだけ

坂上の話によると、第一発見者は榮治の奥さんだった。なかなか起きてこない榮治を氣遣った奥さんが寢室へ行ったところ、榮治はすでに息をしていなかったという。五月二十日、朝のことであった。医師の所見によれば心筋梗塞だという。生きていたような、静かな死に顔だった、と奥さんは坂上に涙声で語ったという。

東彦は「色白の美少年」という形容がぴったりする高校時代の榮治の顔が浮かんで来た。その色白は年を経ても変わる事がなかった。奥さんの表現する「静かな死に顔」が髣髴として眼前に現れた。

坂上と東彦の会話は妙にぎくしゃくとしていた。唐突な榮治の死にまだお互い納得がいかなかったからだろう。特に東彦にはあまりに突然の話だった。二カ月前前に榮治からサンクスレターが届き、東彦は先月返事を送ったばかりであった。悲しみよりも戸惑いが先に襲って来てうまく自分の心情を表現できなかった。これが電話でなく対面しての会話であつたらお互いの感情が表情に現れ、言葉の不足を補ってくれたはずだ。しかし、それは無理なことであつた。どうしてもどこかしが会話の間やイントネーションに現れてしまうのであつた。そんな状況を坂上も察したのである。

「そのうちみんなと相談して香典を持ってお焼香に行く

よ」

坂上もいたたまれない思いになったのだろう。話に区切りをつけてくれたのだ。

電話が切れた後、東彦はしばし黙然としていた。そのうちに坂上と大事な話を何もせずに、しかも折角訃報を知らせてくれたことに感謝の言葉なく終わつたことにひどい後悔が東彦の身を襲って来た。しかし、他方で「悲報に言葉を失うのは当然だ。饒舌になる方が人間性を疑われる」という考えも浮かんで来た。東彦はその言葉に救われたような気がした。だが、やはり気持ちは深く沈み込んでいくばかりであった。そして、コロナ禍で遠くなっていく故郷が「さらに遠くなってしまった」としみじみと思うのであつた。榮治は故郷を繋いでくれていた大事な級友の一人でもあつた。その友人が亡くなるということは故郷がぐんと遠くなり、霞の中にでも入ってしまったようなことに等しい。「そのうち弔問に行く」という坂上に東彦は直ぐに賛意を表しなかった。しかし、そのことは現実的ではなかった。また、お義理な言葉を使う場面ではなかった。首都圏が猛烈なコロナ禍にある中で訪れることは相手に対し迷惑になるのは明々白々であつた。他県に行き駐車した品川や相模ナンバー車の両サイドには他県ナンバーの車が駐車しないという事態が起こっているほどである。東彦が仙台に弔問

に比べ多くなるだろうと、東彦の気持ちは重くなった。坂上との話はなんとなく気まずい形で終わってしまった。東彦は坂上に申し訳ないことをしたと思つた。もう少し彼の労をいたわって上げるべきであり、できないことと分かつていても「そのうち会いましょう」くらいのことを言うべきであつた。悔いが心に絡みついたまま時間が過ぎていった。

東彦は榮治の四十九日を待つて香典を送つた。榮治は地元の有力量で縁者も多かったから残された遺族、なかなか奥さんは悲しむ暇もなく多忙を極めていただろうと推測したからであつた。勿論、お悔やみの書も認め同封した。念のため故人との関係も軽く触れておいた。

香典を送つた記憶も薄れた一週間後のことであつた。「中原美喜です」と名乗る女性から電話があつた。東彦は直ぐに榮ちゃんの奥さんだと分かつた。

「榮ちゃんは私の手紙友だちでもあつたんです。それができなくなつたと思うと寂しくてね。それに故郷の仙台がまた遠くへ行つてしまつたような気がして残念なのです」

決まり切つた挨拶の後に、東彦は榮治との関係を軽く話をした。

「東彦さんと主人の手紙のやりとりは知つておりましたよ。

にいける状況ではない。また、坂上が仙台市内の同級生たちに弔問の声を掛けたとして果たして何人集まるであろうか。恐らく片手を満たすほど集まらないだろう。もし、コロナ禍でなかつたなら級友たちだけではなく、同期生にも声を掛ければ五十人と下らない参列者の偲ぶ会になつたに違いない。大勢で弔問に訪れることも偲ぶ会を開催することも無理なことは坂上も十分承知だつたろう。「皆で弔問に行く」という言葉で自らを慰めてもいたに違いない。

東彦はそのことが痛いほど分かつた。コロナ禍は友情さえも引き裂き、人間関係のさらなる分断を進めている。その上に経済的格差の拡大や貧困化もたらしている。これも著つた人間が自らに招いたことなのか、東彦の心は憂いを増すばかりであつた。

「それにしても包囲網がだんだん狭まってきたな」。そう言いながら東彦は両の手で首を軽く絞めた。そして「おれもそろそろ終活に本腰を入れなければ」と言いながら、つるりと顔を掌で拭いた。手が油でべたりとした。

今年に入って何人目の訃報だろうかと指を折つた。昔の仕事仲間が二人、一人は一年先輩、もう一人は三歳年下である。親しくしていたので衝撃は多かつた。二人ともヘビースモーカーであつた。他に叔父や叔母、友人の母親の合せて五人になる。今年の暮れの年賀欠礼のハガキは例年

夕飯時によく話してくれました。あら、ごめんなさい、気軽に東彦さんなどとお呼びしまして。主人がいつもそう申しておりましたので私もつい口が滑ってしまいました」

意外に気安い方だと東彦は少しばかり気持ちが悪くなつた。お悔やみの会話というものは難しいものであったから。「そんなこと構いやしませんよ。むしろそう呼んでいただいた方が話しやすいですよ」

堅い挨拶から続くこの会話は、話に弾みがつくきっかけとなつた。

榮治が死亡したこの日、持病の定期検診を受けることになつていたというのである。「もしこの受診が一日前であつたなら助かつたかもしれない」と思うと、残念でならないうと彼女は辛そうに語つた。

東彦は話を変えた。

「実はこの七月に『ひろの会』が行われることが一年前に決まっていますね。榮ちゃんに会えるのを楽しみにしていたんですよ」

「ひろの会ですね。聞いていましたよ。場所は三越の近くの東一市場とういちいちばでしょう。ママさんの名前をとつて付けたお店の名前と伺っております。日本全国の銘酒が揃い、旬の肴をいつも用意してくれるって聞いていましたわ」

東彦は内心驚いてしまった。榮治は妻にここまで話して

いたのである。さぞかし和やかな夫婦仲だったのだろうと羨ましい気持ちも湧いた。

「初めての方なのに話が長くなつてしまつてごめんなさい」

「構いませんよ」

好奇心の強い女性だなど、東彦は思った。榮治とはお互い家庭の話はして来なかつたので、彼の妻の美喜さんとの会話は東彦の望むことでもあつた。

「東彦さんは物書きをなさっていると聞いています。それに相模原にお住まいなんですよ。私の叔母が横浜に住んでおり、神奈川には二、三度訪れたことがございます。そんなわけでなんとなく東彦さんには親近感がございました。ところで、主人についての不思議な話がありましてね、あまり人には話せないようなとりとめもないことなんです。どなたかに聞いていただけようと思つていたんですが、言いそびれ今日まで来てしまいました。こんなことを言つては失礼かと思いますが東彦さんは遠方ですし、主人の知人や親類縁者に話が漏れることはないと思ひまして、聞いていただけますか」

「喜んで伺います。もちろん秘密保持もしっかり守ります」

東彦の気持ちには嘘はなかつた。家庭人としての榮治の

話がつつと聞きたかつたからである。また、美喜が内緒話をする対象には東彦はもつてこいであるのは理解できた。東彦にとつて榮治を取り巻く人々とは高校の級友たちを除けば無縁である。例え榮治に不利な、あるいは不名誉な話でも漏らすことはない、美喜は踏んだに違いない。信頼されていることに東彦はありがたく思つた。

美喜の話は聞く人によつては荒唐無稽なものであつた。しかし、東彦には肝を冷やすような思いもよらない話であつた。

「主人が亡くなる五日前、丁度、定禅寺通や青葉通などのケヤキの若葉が萌えだした頃でした。起きてこない主人を心配して様子を見に行ったのです」

美喜は静かに話し始めた。

「主人は決まつて六時半には起床するのにこの日は珍しくまだ寝ておりました。この日の朝は、真綿の空気に包まれたと思えるほどの温い朝でした。誰しも布団の中でもう少しこの温い春の朝を味わいたいと思うほどの心地よさでした。主人を起こすのは可哀想に思えたはずです。しかし、そもいけませんので声を掛け、肩をゆすりました。その時、主人はどう反応したと思ひますか」

「もうちよつと寝かせてくれですか」

言つた途端、あまりにも平凡すぎる表現だと思つた。そして、己の想像力不足に東彦は恥じ入つた。

「みなさんそうおっしゃると思います。ところが主人は《あーあ、こえなあ》だったのです」

「疲れた、ということですよ。寝坊するほど寝て、こえなあですか。一体どうされたんですかね」

「東彦さんもそう思いますよね。私も全く同じでした」

「あなたどうしたの、と思わず叫んでしまいました。何か体に変調でも来たしたのかと心配しましたよ。顔を見ると本当に疲れた表情をしてました。それもあつただけの体力を使い果たし、疲労困憊の極という状態です。これはただ事ではないと思ひました。思はずあなた大丈夫ですかと叫んだ程です」

東彦には榮治夫婦のその場面に不思議なほどにくつきりと脳裏に浮かんできた。榮治には妻の不安な表情や切迫した叫びは一切伝わっていません、また顔色はいつにも増して白く透き通つていたに違いない。

《ああ、こえよ。こんなにこえごと久し振りだよ。九年前の東日本大震災以来のことだ》

「主人は私の驚きの声など少しも聞こえなかつたかのようにのんびりとした声で応えてきました。実は主人のこの間延びた声に私はほつとしました。内心、主人の精神に変

調をきたしのではないかと、一瞬思ってしまったものから。しかし、この安堵は早すぎました」

《友だちの所を回って来たんだよ。大学で親友だった河野が最初よ。新幹線で東京まで行って来たんだ。彼はまだ証券会社で役員をやっている。足を延ばして相模原に住んでいる東彦くんにも会って来た。彼もまた現役で、短大の教員をしていたよ。教師は天職と言い、楽しそうだった》

「主人はまことしやかに東京や相模原へ行ってきたと話すのです。私は主人がきつと夢見たことを実際に行ったとものと錯覚していると思えました。でも様子から窺うとそうでもなさそうで不安が高まってきました」

美喜が電話の向こうでふうつと息を漏らす音が小さく聞こえた。

「主人の友人訪問の話はこの後も続きました。札幌、弘前、秋田と締めて五件ほどでした。《夢を見た》といってくれたなら私はどれほど安心したか。しかし、主人はあまりに真剣に、しかも話がリアルなのです。訪れた方々の暮らし向きや会話など実に具体的なのです。私はまじまじと主人の顔を見詰めてしまいました。しかし、主人は私の懸念など少しも気づかず、大真面目に話を続けていきました。途中で気が付いたのですが、主人の話し方には抑揚がなく、また感情の現れも少なく単調な話し方なんです。まるで独

り言のようなのです。私は主人の気分を害さないようにとそのことは指摘をせず、頷きながら黙って聞いていました。しかし、その感情の無さに不気味さを感じ、次第に恐ろしくなってきました。しかも主人の顔色はいつにも増して白く、疲労感さえ滲みでておりました。私はそれを見て不安が過ぎりました。そして『これはただ事ではない』と気が気でなかったのです。

話を聞いていくうちに、主人は本当に友人のみなさんの所を訪ねたのではないかと思ってしまうました。しかし、私はいつも主人の隣に寝ておりましたから主人が何か行動を起こしたのなら気づくはずですが、そのような気配は少しもありませんでした。ええ、私は普段から眠りが浅いものですからちよつとした物音にも目が覚めてしまいます。知らぬ間に主人が起きたして行動をしたのではないとなると、後は魂だけが身体から抜け出し友人たちを訪問したとしか考えられません。それとも主人が夢遊病に罹ってしまったのかとも一瞬考えてしまいました。でも、そんなことは絶対であり得ませんよね。夢遊病者が一晩のうちに東京や青森などにいけるはずがありませんから。そうするとやっばり、魂が身体から脱けだして超スピードで訪ね回ったとしか考えられません。これはいかにも奇想天外なことですよ。ますます不安が高まりそれとともにすうつ

と頭の血が下がり、周りが暗く見えてくるほどでした。しかし、こんな時こそ私がしつかりしなければと自分を叱咤しました。そして、主人の胸に溜まっている思いを全部吐き出させるのが主人を落ち着かせる最善の方法と気づき、しばらく注意深く主人を見守っておりました」

《おれは寝てたのか》
主人が正気に戻ったような声で話しかけてきました。

「変なことを聞くのね」
私は思わずそう言うと、掛け布団の端に両の手を着いてしまいました。安心感がどつと押し寄せてきたもんですから。

《やっばり夢なのか》
目を見開いたまま主人はつぶやきました。
「そうよ、あなた。めずらしく熟睡していたわ。あんまり起きて来ないものだからこうして起こしに来たのよ」

《そうか、夢だったのか。しかし、足が棒のようになってるよ。どうしてもあちこち訪ね歩いたとしか思えない》
私は思わずそう返しました。安心感がどつと心を包みました。同時に、緊張の糸が切れたように両の手を掛け布団の端に着いてしまいました。

《やっばり夢なのか》
目を見開いたまま主人はつぶやきました。しかし、その

声に張りが戻っておりました。

「そうよあなた。珍しく熟睡していたわ。なかなか起きて来ないものだからこうして起こしに来たのよ」

私はできるだけだけ明るい声で話しました。
《そうか、夢だったのか。しかし、足が棒のようになってるよ。あちこち訪ね歩かなければこんなことにならないはずだ》

理屈の通った話し方に私は普段の主人に戻ったとほっとしてしまいました。

「夢でも身体は動くと言います。あちこち歩き回った夢は意識だけでなく、足などの筋肉も動かしていたのかもしれない。ですから足が棒のようだという疲労感を持つのは自然なことだと思いますよ」

私はできるだけ主人を安心させようと思いました。
主人は私の話を素直に聞いてくれたと思います。
《そうか、なるほど。そうだよ。もう少し寝床にいるよ》

納得したのでしょうか、主人は少し笑みを浮かべ、私に向けた瞳を二三度瞬くと静かに目を閉じました。
主人の様子に安心した私は掛け布団を整え、とんとんと肩の辺りを軽く叩くと台所へと立ちました。
まな板の上に置いたネギを刻もうと包丁を持った時でし

た。その手が止まってしまったのです。何かの力が私の手を止めたというのが正しいと思います。何か得体のない力が働いた、と直感しました。私は急に恐ろしくなりました。私は主人の話を思い出し、その言葉を噛み締めました。話に辻褃がないか、綻びはないかと頁をゆくりくくるように確かめました。しかしそのように読み取れる気配は全くありません。むしろ考えれば考えるほどリアルで創りごととは思えません。

河野さんがまだ会社の役員をやっているとしても生き生きしていたとか、東彦さんが教員は天職だと笑顔で話してくれたなどと、直接会って話してきたとしか思えないことばかりです。そんな風に思い始めましたら包丁を持つ私の手が震えて来ました。何か恐ろしいことの起る前兆ではないのかという考えが心の中に次第に広がっていったのです。「でも、そんなことがあるはずない」と私は強く首を振りました。そして「いつもの主人に戻っていたじゃないの、取り越し苦労よ」と私自身に言い聞かせました。

私はそれでも沸き起こってくる不安を抑えきれませんでした。その時、ふと超常現象という言葉が浮かびました。自分で自分を救おうと苦し紛れで浮かんた言葉だと思えます。この言葉で私の不安は和らぎました。素直に納得できましたですね。主人なら起こしかねないと思つたものです

出来過ぎだし、何か人知の及ばない力が働いているとしか思えなかった。しかし、この話も美喜にしてはならないと東彦は強く思つた。だしぬけの話で彼女を困惑させてはならない。何よりも妻である自分よりも他人である東彦の方が夫との縁が深いなどと受け止めさせる事態は避けるべきだと思つた。悲しみを深めてはならない。

だが、美喜は榮治の話に固執し、釈然としていないように思えた。釈然というよりも理解不能な榮治の言葉に恐れさえ覚えている。その恐怖を少しでも軽減してやりたいと思つた。そして「榮ちゃんは別れを伝えるために友人達を訪問したんですよ」と言おうと思つた。だがやはり逡巡してしまつた。榮治の言葉に困惑させられている彼女の心を少しでも軽くする配慮が必要だと東彦は強く思つた。

ところがだつた。
「東彦さんと話をするうちに段々と気持ちの整理がついてきました。そして思つたんです」

東彦は美喜が何を話し出すのだからかと、思わずスマホを握っていた手に力が入ってしまった。

「今になって思うんです。主人は別れの挨拶をしに行ったのだと思います。きっとそうなんです。何事も完璧にやり終えないと納得しない主人らしい最後です。吾が夫ながら誇りに思いますわ」

から。身内自慢で恐縮なのですが、主人は何か不思議な力を秘めていると時折ふと思うことがあつたものですから。美喜の話を聞きながら、東彦は最近読んだ本に書かれていた幽体離脱という言葉を読み出した。意識や靈魂が肉体から脱け出て自由に動き回るといふことらしい。それは俗に言う夢遊病とは違ふ。夢遊病は眠っているうちに起きだし、何らかの行為をして再び眠つてしまひ、あとでその行為について全く記憶していないという症状という。また、死に瀕してあの世とこの世との境をさまよう臨死体験とも異なる。世界的には幽体離脱をしたとしか考えられない現象は結構の数があるらしい。榮治の場合はその話の内容から幽体離脱と考えてよさそうであると東彦は思つた。しかし、そんな話を美喜に伝えたいなら彼を考えられる。しかし、そのことを美喜に話したならば混乱に陥れるだけだと判断した。

「でもこんな超常現象とも言えることが本当にあるのかしらと思つと、驚きで私まで変になつてしまひそうでした」
美喜の声は沈み、電話越しからでも彼女の悲しみが痛いほどに東彦の心の奥底に伝わつて来た。さらに彼女の言つた「超常現象」という言葉にどきつとし、肌粟立つ思いがした。榮治が幽体離脱をしたと思われる日と東彦が空中遊泳を夢見た日とが同日であつたのである。偶然にしては

まるで東彦の心を見透かしたような言葉であつた。しかも妙に確信めいていた。そんな美喜の言葉に東彦は気圧され、しばし沈黙をしてしまつた。しかし、心の中で東彦は頷いていた。それは少しでも得心がいけばと美喜に東彦が言おうとして言葉だつたからだ。

「その時に私が主人の異常さに気付き別な対応をしておれば、主人は生き永らえたかもしれない。それが残念ですしとても悔いております」

それは残された者だれしも思う言葉であろう。去りゆく者にも見送る者にも悔いは残るというものである。そして、それが人生でもあらうと思つた。

「榮ちゃんはクラスの人たちのことを何か話して下さるか」

東彦は榮治があつた殴打事件を美喜に話していたかどうかを知りたかつた。

「まとまりがあつて気の置けない連中だと話してましたよ。私は羨ましく思つておりました。半世紀以上もの間、途切れなく会が続くなんて」

事情を知らない美喜がこんな遠回しな言い方から東彦の真意を理解できるはずもなかつた。しかし、東彦は美喜からそれ以上のことを聞き出す表現能力は持ち合わせてはいなかつた。彼は諦めるしかなかつた。

「でもこんなことも言っていましたよ。何かの事情でクラス会に顔を出せない級友たちもいたけれど、彼らは彼らで打ち寛ぐ場を持っているに違いない。それぞれがそれぞれでいいんだって」

「榮ちゃんは実に心の広い人でしたからね。それがよく分かるお話しです。私たちのクラス会がここまで続いているのは、榮ちゃんのお人柄も大きく寄与していると思います。」

そう言いながらも東彦は、榮治が松本のことを気に掛かっていたということを知った。やはり榮治はあの一件を忘れてはいなかった。東彦は心が折れるような気分であった。卒業までしっかりと決着をつけておくべきだった。そうすればこんなに長く尾を引くことはなかったはずだった。東彦は返す返すも残念に思うのだった。

美喜は東彦の気持ちなどには無頓着であった。当然であった。

「そうおっしゃっていただけると、主人もあの世で喜んでいてでしょう。そうそう、東彦さんのことは信頼してしましたよ。相模原在住という遠路にもかかわらず彼はよほどのことがない限り必ずクラス会やひろの会には出席してくれる。欠席の場合でも間違いない丁寧な断りの返事をくれるってね。律儀で情に篤い男だし、信頼に足る男だよ」

がつていくのを感じた。榮治が言ったという「東彦は信頼できる」という言葉である。東彦は単純にうれしかった。長いこと東彦の心の中に巣くっていた自責の念も氷解していくのを覚えた。あの殴打事件での東彦の態度を榮治は確かに許してくれていると思った。重しが取れたように東彦の肩は急に軽くなった。

一方で東彦は自身が大きな過ちを起こしていたのではないかとという疑念も湧いて来た。その疑念は急速に膨らんでいった。それは東彦が深刻に思うほど榮治はあの殴打事件のことを気にはしていなかったのではないかとということである。東彦を責めたのはあの時一時のことで、後はすぐに忘れ去ってしまったのではないか。冷静に考えれば、多感な高校時代に怒ったり恨んだり憎んだり、また不安や羞恥、嫉妬を持つたりすることは至極当然のことであり、数え切れない程体験しているはずである。その度に己を責め、後悔していたならば心は育たないどころか身が持たなくなってしまう。それにもかかわらず東彦は執拗なまでに自責の念を持ち続けてきた。彼はようやく己の心理に何かしらの欠陥があるのではないかと疑い始めた。もう少しものごとを気楽に考えて過ごすことが大事であると悟った。自ら許容するという心情が不足していると思った。他人を許す度量も、時に自らを受け入れる寛大さも長い人生では必要で

榮治のまさかの評価に東彦はほっとする思いであった。そして、自分を縛っていた見えない縛りが一瞬にほだけ散っていきような開放感すら覚えた。

「そんなにまで言われますと面映ゆいですよ」
東彦の言葉に対し、美喜からの反応は何もなかった。それは当然のことである。東彦の永年の苦悩など美喜には全く関知しないことであつたから。

「あらあら、随分と長話をしてしまいましたね。でも、東彦さんとお話をさせていただけでよかったですわ。肩の荷が軽くなりました。こんな私でもやはり緊張した生活を送っていたのかもしれない。四十九日も過ぎ、主人は無事黄泉の国に着いたと思います。東彦さんにはお忙しい中、たわいもない私の話を聞いていただき申し訳ありませんでした。また、主人と長いこと親しくしていただきましたことに深く感謝いたします」

美喜はそういって電話を切った。

確かに美喜がいうように長い話であった。スマホを持つ手が痺れるほどであった。何よりも電話の後、頭がぼーっとしてしばらくものを考えられなかった。弔意だけを示すはずのものがあまりにたくさんの内容を含んだ会話になってしまったのだ。

しばらく経って東彦の心にじわつとした温かいものが広あるのだ。
そんなことを考えていくうちに、東彦はさらに榮治に申し訳ないことをしたということに気付いた。東彦が榮治の気持ちをおれこれと付度せず当初から榮治を信頼し、その気持ちを揺るがずにおれば悩むことも屈辱に思うこともなかったのである。東彦が一時でも榮治の心を疑ったことは取りも直さず親友に対する冒瀆であつたのだ。このことは自分の最大の落ち度であつたと東彦は痛切に思った。しかし、謝罪するべき対象の榮治は既にこの世の人ではなかった。

それにしても、東彦は思った。同じ日の夜、二人が荒唐無稽な夢を見たのは一体どういうことだろうか。人知の及ばざる出来事だと言えはそれきりだが、東彦には二つの夢には何か暗号のようなものが潜んでいるような気がしてならなかった。しかし、美喜が「超常現象か」と言ったのは言い得て妙な表現だと東彦は思った。それならだれもあの夢に束縛されることはなく、また、一時の笑い話で済むからである。

その後も榮治の夢を繰り返しい出し、何かしらのメッセージがないかと考え続けた。しかし、榮治が親しい友人たちに最後の別れをしに行ったという話には引かれた。榮治が見もしないことを見たなどということは決して言わな

い。同様に彼の妻がわざわざ東彦をあざむくこともない。榮治は確かに夢を見た。問題は幽体離脱を含め本当に友人らを訪問したか、ということである。この世に人知の及ばないことはまだまだある。だとすれば、榮治が、あるいは榮治の魂が訪問をしたということもむげに否定はできない。「何が何でも別れの挨拶をする」という榮治の強い意志が、そして彼の義理堅い性格がそれを実現させたのだろう。東彦はそう思うことにした。

その夜、東彦は再び夢を見た。やはり空中遊泳であった。この夜の夢の中では、東彦は底にスプリングが付いた靴を履いていた。ほんの少し蹴っただけで体はゆっくりではあるけれど大空に高く舞い上がった。やはり蒼穹の空が遙か地平線まで広がっていた。幾度か跳び上がっているうちに高度が増し、それにつれ綿雲が増えていった。その綿雲がいつしか厚い層をなす雲となった。二十階建てのビルほどの高さであった。東彦はその雲の層を見上げてみると、スルスルと梯子が降りてきたのである。好奇心に駆られた東彦はその梯子に手を掛け登り始めた。困難さや疲れは全く感じなかった。あつという間に頂上に着いた。顔を出すと老婆が椅子に座っていた。机があり、まるで受付をしているかのようなであった。よく見ると何と母方の祖母・ウメノばあさんであった。東彦は思わず「ばあちゃん」と叫んだ。

ばあちゃんは顔を上げると東彦の方を見た。そして「東彦が、おめえ何しに来たんだ」と、驚いた様子であった。それに答えず東彦は、

「ここはどこっしや」と聞いた。

「ここが、ここは極楽浄土だ。何の心配も悩みもなく、みんな仲良く楽しく暮らしているところだよ」

「んだら、おれのとうちゃんやかあちゃんもいるんすか」

「ああいるども」「それだったら早く会いたいなあ。ばあちゃん一目でいいから会わせてけさい」

「それは無理だ。絶対だめだ」

「どうすてもだめなの」

「どうすてもだめだ。いずれ会える」

その一言のみであった。東彦は諦めざるを得なかった。しかし、不思議なことがあった。祖母の唇は全く動かず、ただ微笑だけがこぼれていた。それでも声は聞こえて来るのだった。

「ばあちゃん、ばあちゃんは声を出しているの」

「いや、ここではだれも声など出してはいねえ。声を出さなくても心で思えば聞こえる仕組みになっている。それにここ、極楽は寒ぐも暑ぐもねえ。病気やその他の悩み、苦しみも一切ねえんだ」

だ早い。仏様がそうおっしゃっていなさる」

毅然とした祖母の態度であった。

「ここでも榮ちゃんに会えないのか」、そう思うと東彦の目から涙がこぼれ落ちた。その途端であった。

「ひやっこい」

思わず東彦は大声を出してしまった。その拍子で目が覚めた。東彦は濡れた枕カバーに手を触れた。冷たいと思っただ。「なぜ濡れているんだ」といぶかしげに思いつつ、枕カバーを撫で続けていた。

参考文献

臨死体験（上） 立花 隆 文春文庫

依然として祖母は口を開かぬままだったが、その声は確かに生前のそれであった。

「実は榮治さんにどうしても聞きたいことがあるのっしや。榮治さんにちょっとでいいから会わせてもらえねべが。」

「さっきも言ったとおりそれはだめだ。とにかく仏様のお許しのない者はここからは絶対いられない。お前はま